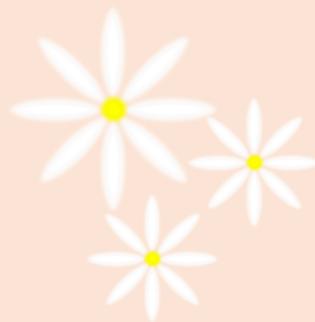


教育は希望である



大阪府立箕面支援学校

PTA 会長 中尾 貴子

日向子（ひなこ）は、私たちのもとに、第一子として生まれてきてくれました。出産時に、呼吸状態が安定せず、泣き声もあげなかったことから、すぐ近くの NICU のある淀川キリスト教病院に搬送されました。妊娠中は順調でしたし、特に問題もない妊娠期間を過ごしていた私たち夫婦にとって、本当に驚嘆すべき出来事でした。特に出産間もない初産婦であった私はひどく動揺し、産んだ子どもがそばにいないこともあって、「生きた心地がしない」思いをしました。その後



すぐに出産した産婦人科を退院した私は、日向子の入院している NICU へほぼ毎日通うようになりました。日向子は約一か月間保育器の中で過ごしました。その間に彼女の先天性異常が判明し、我が子が生涯障がいを持って生きていくという事実を受け

入れることに苦労したことを覚えています。呼吸状態の悪い彼女は酸素投与され

ていましたし、食事も経鼻管で与えられていました。また、たくさんの点滴チューブが身体の周りであって、ひょいっと抱っこする、なんてことはできない状態でした。医者からは「場合によっては気管切開や胃瘻も考えられます。」と言われ、医療的ケアのある我が子を無事に育てる自信は、全くありませんでした。



それでも、翌年の1月末にはNICUを無事に退院し、その頃には特殊な哺乳瓶でミルクを飲めるようになっていました。入院時に看護師の方たちから優しくも厳しい指導を受けるうちに子どもを自分で育てる、という気持ちを持つようになったのだと思います。ただ、自宅に帰った途端に大きな問題に当たりました。

彼女は、軟口蓋裂という奇形を持っていたので、吸啜が非常に弱かったのです。新生児は1日6回授乳しますが、彼女の場合、1回のミルク量40ミリリットルを飲ませるのに、2時間かかりました。このことは当時深刻な悩みでした。初めての育児で、ほとんど1日中授乳し続けるという状況に、くじけそうになりましたし、私自身の人間力を鍛えられました。この状況が約1年2カ月続き、この間何度も細気管支炎や肺炎で入退院を繰り返しました。孤独だった私の子育てに、入院中に知り合った同じ立場のママ友ができ、通院、病院でのPTも始まり、日向子を伴って出かける、ということに徐々に慣れました。また、保健所から保健師

さんも定期的に訪問してくれるようになりました。

日向子が1歳になった4月、大阪府済生会吹田療育園に措置児童として入園しました。2週間、毎日通園していたら日向子は疲れてしまったのか、体調を崩して3週間ほど入院してしまいました。

このことから、週に2回の通院から始め徐々に通園日数を増やしていくことにしました。子どもに手厚い療育を受けさせたいと思う一方で、子どもの体調に常に細心の注意を払って見極め、その子に合った適切な手段を選ぶ、という親としての姿勢をこの時から学んでいったのだと思います。



PT、OT、STの訓練を受けたり、親子で保育を受けることで、子どもの感情を汲み取ったり、子どもの特性を見出したりした期間でした。また、多くの障がいがある子を育てる仲間と出会い、その中には、今も強く寄り添い合い、悩みを分かち合える、いわば戦友のような仲間たちと出会うことができました。

小学校入学前の最後の一年間において、生野聴覚支援学校の幼稚部に入学することができました。日向子は肢体不自由に加えて精神発達遅滞と聴覚障がいがあります。聴覚障がいに関して、当時、月に数回聴覚に絞った療育を受ける機会を



得ることができました。その療育機関の先生が、「ぜひ入学するように」と、熱烈な支援をしてくださって実現しました。生野聴覚支援学校幼稚部の一年間は、日向子が大きく成長し、親の私たちに教育の必要性を実感させていただいた時間でした。体調の関係で週に2日の通学でしたが、日

向子は通学のたびに迎えにでてきてくださる先生の顔を見ると明らかに表情が和らぎ、嬉しそうでした。また学校でしかできない水絵の具や小麦粉粘土、友達と一緒に遊ぶ、食べる、砂場で遊ぶ、という当たり前のことを通して彼女の心は大

きく成長しました。生野聴覚支援学校では日向子に対して、補聴器を着けて音を聞く、感じるを厳しく楽しく教育してくださいました。特に、ガヤガヤしたところや、知



らないところなどでは不快感から大きな声で泣き叫び止むことがなかった子でしたが、それに慣れるように、切り替えができるように教育して下さったことは感動でした。本当にこの一年間は教育で彼女が豊かな心の成長を獲得し、将来への可能性を見出せた貴重な一年間でした。卒業することが、ただただ哀しく、惜しく感じたのを思い出します。

平成 23 年 4 月、小学校に入学し本格的な教育がスタートしました。学校の選択



に関しては、日向子に必要な教育はどういった内容がふさわしいのか、それぞれの学校の支援教育に対する考え方と特性はなんであるのか、を見学や面談を通じて判断することに本当に難

しさを感じました。結局、日向子の体調を最優先に考え、箕面支援学校に入学することに決めました。迷いがなかったとは到底言えませんし、入学してからも、「この学校の教育が本当にふさわしいのか」と悩み続けました。文部科学省のホームページでは、『「特別支援教育」とは、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一

人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものです』とあります。まず第一に、このような考え方を持つ国で子どもを育てられる環境に感謝します。日向子が入学した学校では、生野聴覚支援学校と同様に子



どもと真摯に向き合い、子どもの可能性を引き出してくださる先生に出会いました。親である私は、ともすれば毎日の日常の煩雑さに埋もれて、子どもの成長にいいかどうかということを考えて相手をするのを忘れて、子どものちょっと

したサインを見逃したりしがちです。しかしながら、先生方の授業に対する入念な準備と適切で子どもを飽きさせない授業構成、毎日の丁寧で細やかな対応をされたとき、日向子は本当に生き生きといろいろな表情を見せてくれるようになりました。

このとき、本当にこの学校の教育を選択してよかったと私は心の底から喜ぶことができます。そして日向子は思いもよらない大きな成長を見せてくれ、生活上の困難を改善または克服していけるのだという希望を見せてくれます。



日向子の障がいがあった時の哀しみ、育てる苦悩、成長するにしたがって煩雑で頻繁にある書類手続きなど、さまざまな苦勞が、この希望で一気に昇華できるのです。来年度、日向子は高校に進学する

こととなります。義務教育期間を卒業してよいよ自立に向けて学べる最後の期間に入ります。どのような可能性を見出してくださる先生にまた出会えるか、本当に楽しみにしています。

